

♥パーフェクト・ボーイフレンド♥

★このコンテンツは成人向けです。未成年の方はご覧になれません。

★これは『マイ・パーフェクト・ボーイフレンド』のサンプルです。
本編とは異なる場合もございますので、あらかじめご了承ください。

♥目次

1・ママは彼氏の身替わり

2・デートは完璧

3・「ボーイフレンド」との初夜

4・わたしの処女はママのもの

5・完璧なカップル

あとがき

*各項目をタップするとその章へジャンプします。

1・ママは彼氏の身替わり

ヘルマ・フローリンは自宅の居間のトレッドミルの上でランニングの最中でした。軽快なポップミュージックが流れる中、彼女はもう3マイル分走っていました。

彼女は体にピッタリのランニングタイツとタンクトップを身に着け、軽々と足を動かしています。一歩走るたびに胸囲100センチHカップの乳房が揺れますが、まったく気にする様子もありません。バランスを崩すこともなくランニングに勤しんでいました。タイツを押し上げる大きなお尻は二つのバレーボールのよう。お尻は標準サイズを超えているため腰回りの布地を引っ張り、嫌がうえにも股間の形を強調するようにタイツが食い込んでいました。トレーニングの後にシャワーを浴びるため、面倒臭いのでパンティは履いていません。なので谷間の形がくっきりと表れているのです。腰は引き締まり、中年女性にしてはほっそりしているのです。胸とお尻はなお一層強調されています。

ヘルマは36歳のシングル・マザーです。小さな化粧品会社でCEOを務めています。彼女は仕事を楽しんでいて、周りとも上手く協調できるやり手の女性です。彼女の会社はほとんどが女性の社員と取締役で構成されていました。ヘルマは大きな野心を持ちません。その代わり従業員を大切に、いつも最高の仕事をしたいと心掛けています。

ルームランナーを降りると、ヘルマは10kgのダンベルを両手に持って筋肉トレーニングを始めました。特に大胸筋を鍛えています。なぜなら彼女の胸はことのほか大きいので、胸や腰回りを強化する必要があるからです。おかげでその大きさにも関わらずヘルマの乳房はほとんど垂れていません。張りのあるふたつの肉球が弾んで動くのです。男性はもちろん、女性でも思わず見惚れてしまう美乳でした。

ヘルマは薄っすらと汗を掻き、肌をほてらせます。そうすると体全体が桃色に染まり、たださえ魅力的な30代の女性をなお引き立てます。今はスッピンでいるにも関わらず、ヘルマのナチュラルな美貌は魅力的なものです。眉は太くクッキリしていて意志の強さを感じさせ、頬骨は控え目ですが、顎は適度に張っていて力強さがあります。眼は大きく、いつも笑っているように優しさを湛えています。鼻は美しく聳え、女神のような顔立ちを整えていました。

突然玄関のドアが開きました。乱入してきたのは1人の美少女です。

女の子はものも言わず、ドスドスと乱暴な足音を立てて、居間のソファにどっかりと座り込みました。

「まあ、クリスティーナ、どうしたの？」

ヘルマは驚いて振り返り、ダンベルをラックに置いて、少女の方へ行きました。隣に座ると、腕を組んでむくれている彼女の肩を抱きます。

「ダーリン、一体何があったの？今日はリックとデートのはずだったじゃない」

クリスティーナと呼ばれた女の子は、ヘルマの実の娘でした。ブロンドの髪の毛は母親よりも艶やかで、顔立ちはもちろん若々しく、体つきもまだ成長中です。

「クリス？」

「私って魅力がないんだわ」

ようやくクリスティーナが返事をしました。

ヘルマは眉をひそめました。彼女には何かの冗談にしか聞こえません。

「魅力がないってどういうこと？」

「分かるでしょ、ママ？私が1人で歩いて帰ってきたのが、『歩いて』よ、信じられないわ。デートをドタキャンされて、自分の足で歩いたの、彼の車で送られるのじゃなく」

「リックはどうしたの」

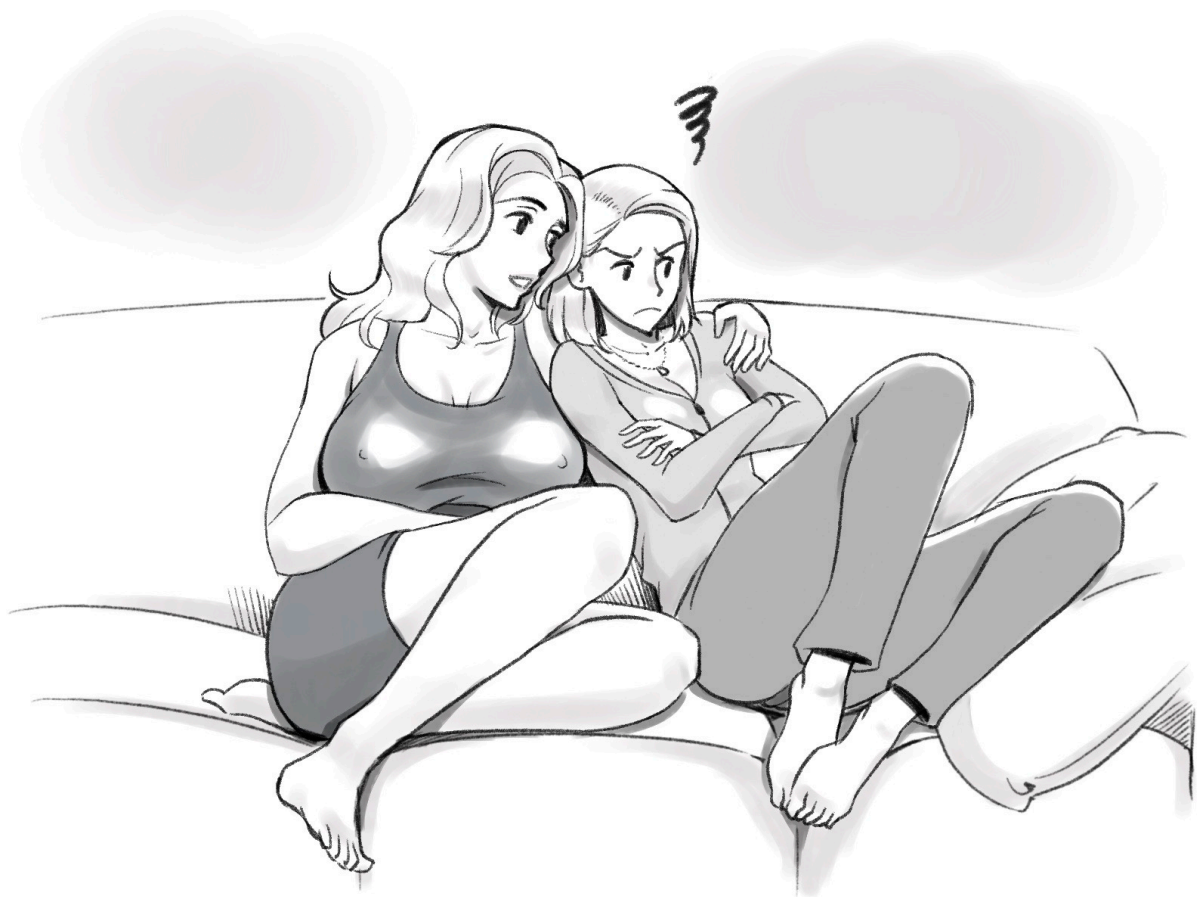
ヘルマは娘のボーイフレンドを思い出しました。ハンサムではありますが、どこか軽薄さを感じさせる、あまり印象の良くない若者です。とはいえ、若い男性はそんなものだとしてヘルマは思っていました。ところがクリスティーナはカンカンに怒っているのです。

「友達から聞いたの、あいつ、二股どころか三股、四股掛けてたの。何人ガールフレンドがいるのか見当もつかないわ」

クリスは顔をしかめました。でもその横顔はなんともチャーミングで、表情豊かで、ヘルマにはかえって可愛らしく見えました。

「それで喧嘩になったのね」

「喧嘩にさえならなかったわ。私がちょっと文句を言ったら、あいつ、開き直って謝りもしないの！あたしを腰の軽い女みたいな言い方で侮辱して、さっさとサヨナラよ。彼のシボレーのスポーツカーで。それで歩いて帰る羽目になったわけ。まったく馬鹿馬鹿しいったら」



ヘルマはかつての彼氏を思い出していました。彼女は18歳の時にクリスティーナを出産していました。とても若い妊婦でしたが、相手の恋人はヘルマが妊娠したのを知った途端、掌を返したように冷たい態度を取り、どこかへ消えてしまったのです。ヘルマは未婚の母親になりました。支えてくれたのは、今はもう亡くなった両親です。彼らはヘルマの不運を慰め、赤ん坊の誕生を盛大に祝ってくれたのです。

幸いというか、クリスティーナはヘルマ似でした。美人の母親そっくりの美少女になり、相手の男性の面影はほとんどありません。彼らを知っていた人々は、クリスティーナが99%母親の遺伝子を受け継いでいると断言したものです。

未婚の若い女性にしては、ヘルマは恵まれていました。弁護士が無責任な元恋人を探し出して慰謝料を請求してくれたので、彼女はそれと親の財産を元手に友人と共同で会社を立ち上げ、幸いにも経営は順調です。赤ん坊はすくすくと育ち、素晴らしく魅力的な子供から少女へ成長しました。

ヘルマはクリスティーナに夢中でした。男に見捨てられた思い出も、娘の魅力の前にはすっかり色褪せ、なんのトラウマにもなりません。ですが、それ以来男性とのデートはほんの数回きりで、恋人同士にまで発展することはありませんでした。それよりも娘の事が気かりで、SEXの最中でさえ、クリスティーナが家で泣いていないか心配したほどです！

その代わりと言ってはなんですが、ヘルマはなぜか女性にもモテる女性でした。会社員ばかりでなく顧客にも彼女へ色目を使う女性がいる、デートへ誘われたものでした。興味本位でつき合ってみると、案外女性の方が気持ち良いことが多く、愛情関係のもつれもなく、純粹にデートを楽しめたのです。もちろんレズSEXも経験し、新しい世界が彼女の前に開かれました。クリスティーナが幼い頃は時々ベビーシッターの少女とエッチしたこともありました。アルバイトの女の子はみんなヘルマに愛されることを喜び、貴女みたいな素敵な大人になりたいと言っていました。ある時など彼女はレズビアン系のベビーシッターにオナニー用のディルドーとストラップオンを贈られ、使い方まで習わされました！

とはいえ、それも娘が成長するまでは抑えられており、クリスが18歳になってようやく新しい恋人を（男女を問わず）作るべきかもしれないと思い始めていたところなのです。

ヘルマはあらためてクリスティーナを品定めしました。

両性とのSEXを経験した後なら、クリスはどちらの性でも求愛者が現れることが、彼女には分かります。形の良い桃色の唇、瑞々しい素肌、胸は母親ほどではありませんが90センチFカップで、若いだけあって、張りのよい乳房が尖り、乳首が上向きになっています。腰はくびれ、お尻は引き締まっています。太股はまだ若い鹿のようにほっそりしていますが、若い力が漲っています。彼女の肉体は立っているだけで一幅の絵になるようなスタイルの良さです。

言うまでもなく顔立ちは美しく、幼い頃はモデル雑誌に写真が掲載されたほどでした。クリスティーナがそれほど乗り気ではなかったので続きませんでした。あるいはファッションモデルになっていたかもしれません。

こんな素晴らしい少女を振った男に腹は立ちましたが、同時に、クリスティーナが誰か他の男に抱かれている姿を想像すると、ヘルマはカッとになりました。嫉妬ではないのです。それどころか彼女は、娘を汚す人間が許せない、自分以外に彼女の肌に触れる男がいることに耐えられないのでした。

ふとその事に気づき、ヘルマは動揺しました。まさか「娘に」嫉妬するのではなく、「男に」怒りを覚えることに…。それではまるで恋人を横取りされた女のようにです。彼女は動揺を悟られまいと無意識に巨乳の前で両腕を組んでいました。それから娘の隣に座りました。

「逆に考えたらどう？無責任な男に弄ばれるより、しっかりした男と付き合うという教訓を学んだということ。あなたの男を見る目は前よりずっと確かになったわ」

「そこまで冷静になれないわよ」

クリスティーナはソファの上で体をズラし、母親に寄り掛かりました。

「少なくともリックは素晴らしい女性を失った不運を嘆くべきね」

「私とその素晴らしい女性？冗談でしょ」

「ママは冗談なんか言わないわ、こんな時に」

「慰めてくれてありがとう。でも、18にもなって恋人がいない、SEXも経験していない女の魅力ってどんななの？クラスの娘の半分以上はもうとっくに経験済みなのに」

「SEXがステータスシンボルじゃないのよ。自慢する方がおかしいわ」

「でもまだ大人じゃない！」

「ねえ、本当にしたことがないの？ディープキスも？」

「ないわよ、全然！キスだってマジなのはママ以外一度もないんだから。…何を笑っているの？」

思わず微笑んだヘルマに、クリスティーナは渋面を向けました。ヘルマは慌てて手を振り、

「いいえ、笑ったんじゃないの。ただ、なんだか、嬉しくて」

「嬉しい？」

「ええ。どうしてかしら、自分でも分からないのだけれど、私としかキスしていないのが、ちょっと嬉しくて…ごめんなさい、変な事を言ったわね」

クリスティーナはジッとヘルマを見上げました。まだ母親はトレーニングの影響で薄っすらと汗を掻いています。小皺もありますが、同じ歳頃の女性に比べ、ヘルマはとても若々しく精力的に見えました。

「…私もママみたいな美人だったらよかったのに」

「まあクリス、何を言うの！？あなたはもうとっくの昔に魅力的よ」

「だったらなんで彼氏ができないの？」

「いいことクリスティーナ、大切な人と巡り合うのは時の運なの。決して焦ってはいけないわ。いずれあなたにも運命の恋人が現れて、うんと幸せになりますからね」

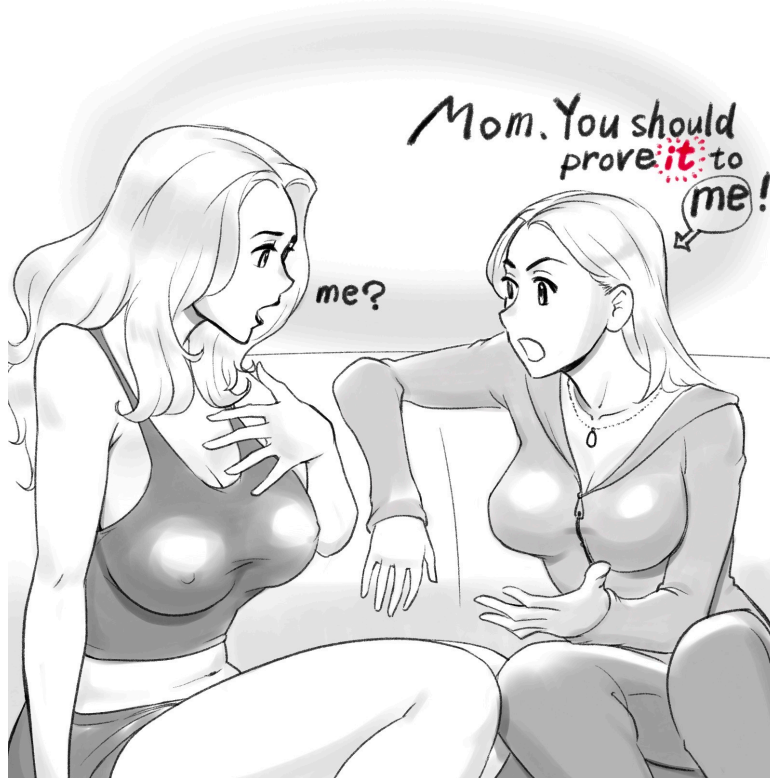
「はいはい、ありがとう」

「ママが男性だったら、あなたを放っておいたりしないわ」

「またもう、お世辞を言う」

「絶対お世辞じゃない。本当よ。あなたほど魅力的な少女を手放すものですか。ましてやデートを放り出すなんて考えられないわ」

クリスティーナは妙な目つきで母親を見上げました。



「それなら証明して」

「証明って？」

「私を恋人にしたいんでしょう？なら態度で示さなきゃ」

「私が男ならの話よ」

「ほらやっぱり。自分は出来ないから、娘を慰めてるんだわ」

一向に気分が良くならない娘に、ヘルマは困りました。

「ハニー、どうしたらいいの」

「だから、ママが男だったらっていう前提で、私にアプローチするの」

「ちょっと待って。…クリス、ママは女なのよ？それにあなたの母親」

「ええ、それは前から知ってる」

「まさかあなたは、そのう、男の恋人がデートですのような事を私にしろと言うの？」

「さっきからそう言ってるわ」

「ええ…？」

「ママだってデートくらいしたことがあるでしょ？私の父親と。だって私が生まれたんだし」

「パパのことは言わないで」

「私だって言いたくないわよ。DNAはあるんでしょうけれど、ママを泣かせる男なんて最低だわ」

「クリスティーナ…」

思わずヘルマは娘にときめいてしまいました。今の発言は、彼女の胸を打ったのです。

「それでミス・ヘルマ・フローリン、あなたは娘のクリスティーナへどんな手ほどきをしてくれますか？」

馬鹿丁寧な娘の言葉に、ヘルマは諦めたようにため息をつきました。

「ねえ、いいこと、スウィートハート。ママはあくまで真似をするだけなのよ」

「なんでもいいから早くしてちょうだい」

ヘルマは空咳の一つすると、クリスティーナの肩を抱き寄せました。そして真面目な顔でこう言ったのです。

「ダーリン、世界中の誰よりも愛してる。君を離さないよ」

思わずクリスティーナは吹き出していました。

「クリス」

「だって恥ずかしいんだもの！」

「笑うのだったら止めるけど？」

「ああ、いいえ、ミス・フローリン。続けて。それから？」

ヘルマは突然緊張しました。軽く頬に接吻し、冗談の一つも言って、終わるつもりだったのです。ところが彼女は娘の顔を正面から見ると、美しい少女の顔にとっても居た堪れなくなっていたのです。顔から火が吹き出しそうなほど頬が熱くなります。

（まあ、どうしたというの、ヘルマ？あなた、初恋でもしたみたいよ）

自分にそう冗談を心の中で言い、ヘルマはグッと娘の肩をさらに寄せました。するとクリスティーナの方も真面目な顔になります。自分から目をつむり、唇を突き出しました。彼女の頬がほんのり赤く染まっています。

ヘルマは予定を変更し、まず予行演習として娘の頬に軽く唇を触れ、それから鼻の頭にチュッとキスし、そして…ゴクリと生唾を飲んでから、桃色の唇にそっと触れました。ただそれだけなのに心臓が破裂しように動悸し、心を揺さぶります。思春期の少女独特の爽やかで華やかな体臭がしました。10秒間もそうしていたでしょうか。ヘルマは唇を静かに離しました。

クリスティーナは薄目を開け、言いました。

「…それだけ？」

「それだけって？」

「世界中の誰よりも愛している恋人が、ちょっとキスするだけで終わるの？これじゃあ、いつもの送り迎えのキスとなんにも変わらないじゃない」

ヘルマはさらに戸惑い、混乱しました。

「で、でも、クリスティーナ。これ以上は本当の恋人みたいだわ」

「ママはそれを証明しなくちゃいけないのよ、ミス・ヘルマ。私がリックに振られた代わりに、あなたが私を性的魅力に溢れた少女だって態度で示すべきだわ」

(『性的魅力』ですって!?)

ヘルマはますます赤くなります。

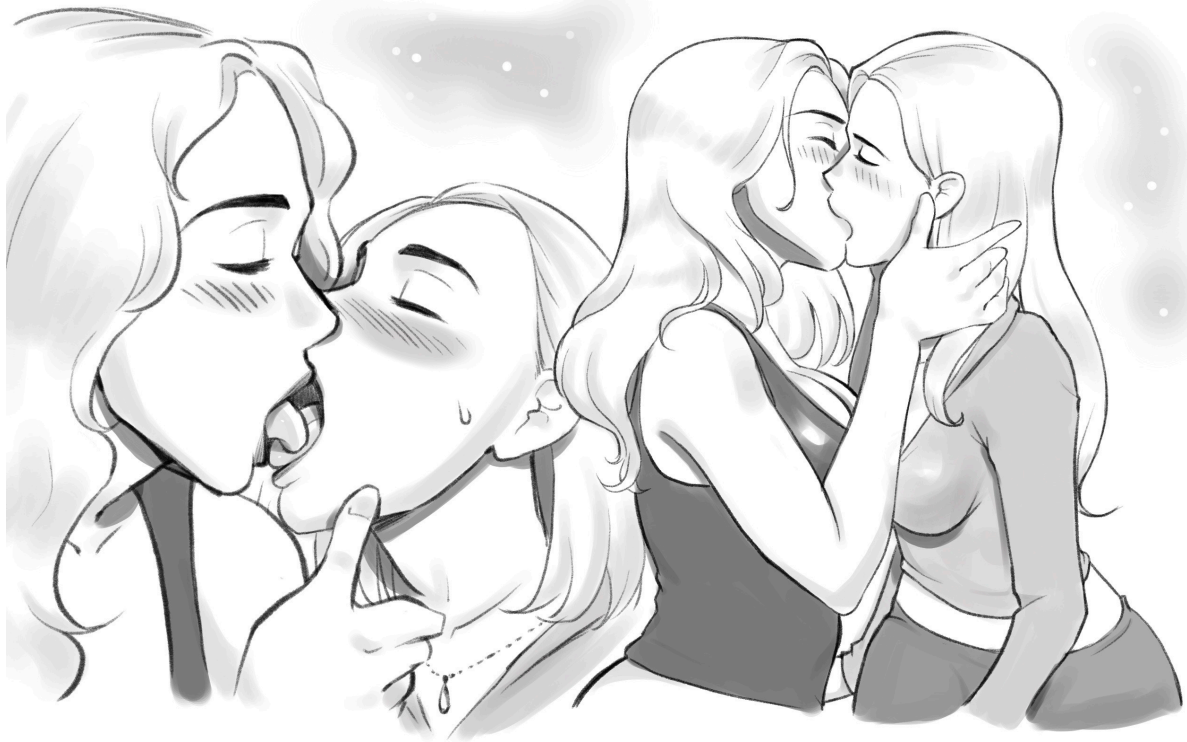
「お願いよクリス、分かって。私はあなたの母親なのよ」

「そんな事関係ないわ。ママが私に誠実でなければ、今日はもう自分の部屋に閉じこもって夕食も一緒にしませんからね」

こんな風に脅迫されたせいで、ヘルマは覚悟しなくてはならないのを知りました。

「…それじゃあミス・クリスティーナ。くれぐれも後悔しないでね。これからするのは、自分の母親とのファースト・キスなのよ。恋人よりも先にする」

「そちらこそ後悔しないで、ママ。娘とディープキスをするのを。不道德だと思うなら、ここまでよ」



返事代わりにヘルマは今度こそクリスティーナを抱き寄せ、思い切って唇を重ねました。今度は本気のキスです。自分の唇で娘の唇を挟み、愛撫し、舌尖を伸ばしてクリスティーナの唇の表面を撫でました。唾液を唇に塗りたくり、さらに二つの肉丘を割って、その下の真っ白な歯に触れます。そこも丁寧になぞり、白い鍵盤を掻き鳴らしました。すると秘密の扉が開き、ヘルマの舌を迎え入れます。ヘルマは舌を口内へ伸ばし、娘の舌を舐めました。

ギュッとクリスティーナが抱きつき、母親の腰に両腕を回して、しっかりと固定します。クリスティーナは無意識に自分の舌を蠢かし、初めてのディープキスを逃すまいと、ヘルマの舌と擦り合いました。

二人の唇の間から湿った艶めかしい音が漏れ、端から唾液が垂れてきます。クリスティーナはもうすっかりキスに夢中で、自分から舌を伸ばして母親の愛撫をねだりました。伸ばされた舌をヘルマは唇をすぼめてヴァギナのように迎え入れ、あるいはペニスのように頭を

振ってフェラチオしました。ヘルマは自分でも気がつかないうちに、自分が知っているキスのテクニックを全部使っていました。口蓋を舐め回し、唾液を吸い、舌をいやらしく絡め合って、舌と唇で実の娘を犯したのです。

そんな母親にクリスティーナは生まれて初めての悦楽を感じさせられ、腰をしっかり抱き締めて、無我夢中でヘルマの舌を貪りました。そしてとうとう、人生初めてのアクメを感じたのです。舌から全身へとろけるような快感が広がり、頭为天辺へ痺れるような疼きが走ったのでした。すでにオナニーを経験済みのクリスティーナですが、まさかキスでこれほどイカされるとは思ってもいなかったのです。

ようやく唇が離れ、その間に透明な唾液の橋が掛かりました。二人は見つめ合いました。どちらも頬がリンゴのように赤くなっています。母親と娘は荒い息を吐き、キスの余韻に酔い痴れていました。

「…ああ、ママ！」

とうとうクリスティーナは言いました。

「最高のプレゼントだわ！私、ついに大人のキスをしたんだわ！リックなんてクソみたいなものよ」

「お行儀が悪いわよ、『クソ』なんて」

そう言いながら、ヘルマは微笑んでいました。

「クリス、あなたって、なんて言うか…」

彼女は二の句が継げません。

クリスティーナが悪戯っぽく笑います。

「すごく魅力的？」

「それ以上よ。ママは、あなたがこんな…こんなに素敵な女の子だったなんて、思ってたかった。ママが間違っていたわ」

クリスティーナはすっかり嬉しくなって、ヘルマの頬にそっと触れました。

「…それじゃ後悔してない？ママ」

「あり得ないわ、ダーリン」

二人はまた自然に唇を重ねました。たちまち極上の悦びが二人を支配し、キスの虜にさせます。ヘルマはクリスティーナをソファへ押し倒し、キスの雨を降らせました。

「…ああ！本当の恋人ってこうするんだわ」

うっとり娘が呟きます。

♡つづく♡